

へ。と 師 身代わり

が先
ポ〜ン





ペテン師と身代わり



ポ
ン
黒
実
操

著
出
題
画



竹の子書房文庫

※本書に登場する人物名・団体名・描かれている内容は架空のものです。作中において現代では若干耳慣れない言葉・表記・表現が登場する場合がありますが、これらは差別・侮蔑を意図する考えに基づくものではありません。

カバール ポーソン

かの大陸の西方逃れ、東へ東へ流れゆく。

ゆきゆきて辿り着いたは、海の国。

君よ知るや、海の国。

そこは多島海から成り立つ、清潔な国だった。

潮風に満たされ、碧と白に輝く美しい風土。あお

住人は、浅黒い肌に赤茶けた髪と瞳を持っている。何世代にも渡り太陽と潮風に晒されたせいでと、古老達は大真面目に語る。

服装は、白を基調にした緩やかな貫頭衣だ。かんとうい 各々が胸飾りや腰帯に、貝殻や玉で装飾を施しているが、くすんだ色合いのものばかりを好む為、地味な印象は否めない。

その国に、非日常が訪れた。

祭りでもないのに、続々と広場へ人が集まってくる。そこにある物見台の下へと。

上を向き、見守る老若男女。この国では、首府のある島に聳^{そび}える大灯台の他に、これ以上高い建造物はない。その頂上に漆黒の塊。よく見ると人の形をしている。

——小男。

幼い子供くらいの背丈しかないが、立派な大人の男だ。真っ黒な布にその身を包み、両手には白手袋。頭にはこの国では類を見ない、大きな被り物が乗っている。

「さあて、お立会い。目ン玉ひん剥いて、よおく御覧あれ！」
愛想良く叫ぶと、ひよいと勢いをつけて手摺^{てすり}に跳び乗った。
舌先を長々と出し、風の様子を確認する。
向きも強さも申し分ない。

眼下には、沢山の仰向いた顔、顔、顔。

皆、固唾^{かたず}を飲んで見守っている。誰も、一言も漏らさない。

「よしッ」

唇を舐め、手摺を蹴った。

その身体が宙に投げ出される。

雲一つない空。黒く切り抜かれたように、小男の姿が躍った。

どよめきが、悲鳴が、湧き上がる。

——さあ、驚け。

男は、両手足を開いた。

身体に巻き付けられていた黒い布が半球を描き、四肢を

支えに膨らんだ。

悲鳴が歓声に変わる。

背中側に反った手足、そして腰は、常人にはありえない角度に撓たわんでいる。

小男は少年時代、曲芸師だった。

群衆に見せるのは、笑顔。自信に満ち溢れた、勝負の顔だ。

「つつ」

布の膨らみに引かれる小男の手足が軋きしみ、一瞬だが鋭く痛んだ。それでも表情は崩くずさない。崩す訳にはいかない。風に合わせて、布を操る。

日に焼けた顔、顔、顔がぐんぐんと大きくなる。皆、瞬きさえ忘れて、小男の舞い降りる様を凝視している。

地面が近付く。小男は力の限り、両足を前にやる。大きな被り物に隠れた額から、脂汗が吹き出した。

直立の姿勢に持つていき、握り締めていた布の端を離す。捕らわれていた風が抜けた。

ストーン。

ここしかないという瞬間で、地面に降り立つ。そのまま深くお辞儀。被り物の天辺てんぺんに隠れ、その面持ちおももは誰にも見えない。

わつと歓声が上がる。万雷のようだった。

小男は、背にある漆黒の布を布膜^{マント}と呼び、広い鍔^{つば}の付いた大きな被り物を帽子と呼んだ。どちらもこの国にはないしろもの代物だ。

布膜には発条^{ばね}が仕込んである。四肢で突っ張ることが条件で、空中で花のように広がるのだ。勿論このような仕掛けも技も特殊なもの。

帽子の中には、見世物で使う様々な物が収納されている。結構な重量だ。それを示してやるだけで驚かれるので、演目の一つにも数えていた。

矮^{わいく}躯であるが故^{ゆえ}の、武器。

小男は不思議の技を見せることで、食^ぶい扶^ち持を稼ぎ、こ

の海の国まで流れてきた。

異国慣れしている為、ここの言葉を上手く喋った。発音の未熟な面はあつたが、日常会話には困らない。

小男には、名乗るべき名前がなかった。

育てられた国を身一つで逃げ出し、慣れた曲芸と下手糞な奇術と、見様見真似の話術と演技を頼りに、生きてきた。徐々にそれらは磨かれて、熟練された。

それに連れて名無しの小男は、行く先々で〈ペテン師〉と呼ばれるようになっていく。

西方の何処にも居場所がなくなり、とうとう東の果ての果て、この海の国までやって来た。

はるばると辿った陸路には、険しい山もあれば砂漠もあつた。常に死を意識する旅路だつた。

それでも進んだ。

進むしか、なかった。

——あそこに逃げ込んでしまえば、もう追つ手が掛かることもない。

——沢山の訳ありな奴らが、あの国へ行つたものだ。

道すがら、聞いた噂。

小男は思う——ここなら、生き直せるかもしれないと。

「急なお話で大変に恐縮でございますが、是非とも私ども^{わたくし}の船に乗って戴^{いた}きたいと、お願いに上がった次第でございます」

小男は宿の寝台に足を組んで座っていた。

その前に、この国の兵の長を名乗るものが跪^{ひざまず}いている。

「船旅の途中、巫女様^{かんなめ}のお慰みに貴殿の不思議の技を見せ

てくださればと思うのです。ほんの三日程度のこと。報酬

は帰港しました際に、こちらを」

差し出されたのは、鶏の卵程の琥珀^{こはく}だった。

「如何^{いかが}でしょう。悪いお話ではないと思いますが」

「悪くないな、確かに」

帽子に隠れて、小男は刮目^{かつもく}する。この琥珀を換金すれば、ひと財産だ。この国で暮らしていく基盤を作るのは、容易だろう。

何より、この兵の長との人脈が役立つことになるのは間違いない。

異国人の自分が、ここ、若^もしくはこの近辺にあるかもしれない西方人の街に腰を落ち着ける為にも——と、小男は、この降って湧いた幸運に感謝する。

「身に余る光栄なお話。精一杯、勤めさせて戴きましょう」「ご承知戴き、有り難き幸せ。それでは明朝、お迎えに上がります」

兵の長は膝を突いたまま、深々と頭を下げた。

出港の日。

その物々しさ。

兵の長が、鎧装束でやってきた。正装なのだろう。

「では、何卒^{なにとぞ}よろしくお願いします」

^{おおぎよう}

大仰な程に頭^{こうべ}を垂れる。

「ああ、わざわざすまないな、じゃ、いつちよ行くか
……って、うへっ」

宿を一步出た小男の足が^{すく}竦む。

群衆だ。

小男の姿に、わつと湧く。

「な、なななな」

「皆、貴殿の船出を喜んでいのですよ。巫女様の大切な
お役目に、ご同行戴くのですから」

小男に向けられる晴れやかな顔、顔、顔。

「いってらっしゃい」

「お役目、感謝します」

「ありがとう」

口々に好意溢れる言葉を放つ。

小男は戸惑ったが、徐々に気分が上がる。相好そうごうを崩し、

帽子の鰐をひよいと上げた。

船までの道行きは、まるで凱旋がいせんの誉ほまれのようだった。

港には木造の帆船があつた。

外壁には所々に丸い玻璃ガラスが嵌はめられた窓がある。小男は

それを見て、この辺境の小国が思いの外、高い技術を持っていることを知った。所詮最果ての国だと、心の片隅で侮あなづっていたことを恥じる。

待っていたのは、兵達が九人。

「ご苦労。準備は滞りないな」

長が加わり、見るからに勇ましい男達が十人。

「よくぞ、この船に」

長を先頭に皆が一斉に一礼し、小男を迎え入れた。

小男は少し照れたが、船の様子に気を戻す。

「へえ、こんなに細長い船、初めてだ」

真っ白い帆布は、この国の人が着る服と同じ色だ。目が痛くなる程に晴れ渡った青空に、くつきりと映える。

「風頼みですから。この時期は、時間帯で吹く風が決まっているのです、この船は大変に役立つのです」

「確か、三日つて言ってたか。何処まで行くんだ？」

「――御覧ください！ 皆、貴殿のことを見ていますよ」

兵の長が、小男に指し示す。

「う、わっ！」

群衆が——そこに広がっていた。

誰もが、甲板上の小男に注目している。

咳き^{しわぶ}一つしない、不自然な沈黙。

流石に小男は面食らった。

「——よう」

試しに手を振ってみる。

割れんばかりの歓声。

「行ってくるぞー！ 帰ってきたら、また飛んで見せてや

るからな」

歓声に哄笑^{こうしょう}が混じる。破顔^{るつぽ}の埒^{らち}。

空中遊泳のときよりも激しい。少し、そのことが引っ掛

かったが——すぐに忘れた。

「夕餉ゆうげののち後に、巫女様に貴殿の技を見せて戴きたいと」

兵の長は、小男の前に膝を突いた。

「ああ、そりゃ構わないさ。その為に来たんだからな」

小男はすっかり調子に乗って、寝台の上で靴のまま脚を組んで座っている。

「だけど、空飛ぶのは駄目だ。進んでる船の上だと、下手すりゃ俺は海に出ちまうからな」

「勿論でございます。それにあの技は巫女様が怖がるといけませんし、何かこう気が晴れるようなものを……」

「ああ、任せとけ。女の子が好きそうな奴をやつてやるよ。女の子なんだろう？　巫女様つて」

「——では、そのように」

問いには答えず、兵の長は頭を下げて出ていった。

「発音が、拙かったのかな」

小男は、さほど気にも留めずそのまま寝転ぶと、帽子の中に手を突っ込む。

「さあて、どの技を使おうか」

〈巫女様〉と呼ばれるその人は、部屋に置かれた、ただ一

つの椅子に腰を降ろしていた。

周りを兵に囲まれている。右手には兵の長が控えていた。

——あれが貴人^{あてびと}だつて？

声に出す愚は犯さないが、眉根は寄つた。

この国に来て、初めて見る白晳^{はくせき}の容貌。

藁色^{わら}の髪と目。まだ七つか八つに過ぎないが、顔貌^{かおかたち}は既

に整っていた。

ひと目で下ろし立てと知れる、真新しい、裾の長い貫頭衣だけを身に付け、靴さえ履いてはいない。足の指が痛々しく荒れていた。

兵の長が、固まつたままの小男に声を掛ける。

「まあまあ、そう緊張なさらずに。普段と同じようにお願
いします。巫女様も、それを望まれていますよ」
初めて打ち解けた物言いをした。

「あ、は？ あはは。いやいや」
照れた振りで頭を下げた。被り物の鰐に隠れて〈巫女様〉
を見る。

視線が合った。

〈巫女様〉の藁色の瞳が、小男の瞳孔を射抜く。

「あははは。——やあ、それでは演^やらせてもらいましょう！」
それを真正面から受け止め直し、小男はぐつと腹に力を
入れて声を張った。

「私めは奇術師でございます。何故なれば、西方では不思議の技のことを、奇術と呼ぶのでございます故」

複数の絵札の中から、演者には内緒で観客が選んだものを示す、所謂^{いわゆる}当て物。小男の持ち芸の中では軽い前振りになる、この演^だし物が非常に受けた。もう一度、もう一度と呼び声が掛かる。

そもそも、この国には遊びに使う絵札がないようで、物自体も珍しがられているのだ。

小男には、得意とする手順があつた。

決まって最初の二回を外してみせて、最後の一回で大き

く決める。当てるだけでは済ませず、おまけを付けるのだ。
お国は違えど、ここでも場は盛り上がる。

当ててやるべきは【貴婦人】の絵札。それを二回連続で
失敗してみせた。

「ええい、今のもナシ！……それッ、この、これが正解だ」
そして、意気揚々と突き付ける。

絵札と、珊瑚の指輪を。

「貴婦人は、選んでくれたお前の心を所望だぞ」

「あ、ああ！ いつの間に！」

その兵は、薬指を探る。あるべき指輪はそこにはなかった。

「あはは、浮気は駄目ですよ」

指輪の兵の隣で、目立って年若い兵が声を上げた。その笑顔はなかなか愛くるしい。

小男は、帽子で顔を隠しながらホッと息を吐く。薬指の指輪は、西方では結婚や婚約を意味するが、ここではどうだか分からなかった。指輪をしている兵が全員ではないことと、それらの兵が皆、落ち着いた雰囲気をしているところに、賭けたのだ。

「お、おい、何だよ、人間きの悪い」

「大丈夫、ちゃんと黙っててあげますよ」

「今、黙れよ、今」

小男を囲む輪が、ドツと湧く。

――〈巫女様〉を除いて。

硬く唇を結んだまま、藁色の瞳が直視しているのは、演目ではない。小男だ。

「えー、では、今度は巫女様を選んで戴きましょう」

兵達には見えないよう、被り物の鰐の下から挑むように睨み、小男は〈巫女様〉に絵札の束を差し出す。

微かに〈巫女様〉の頬が引き攣った。

すかさず兵の長が割って入る。

「申し訳ございません。実は、巫女様は口を利くことが叶わないのです」

スツと、空気が張り詰める。

先程までの和やかな雰囲気は、立ち消えた。

「へえ、そいつは残念だ。だけど、札を選ぶくらい、指で示せばよくないか？」

無邪気を装い、小男は膨れてみせる。

「いえ——もう遅いですね。お開きとしましょう。巫女様も殊ことの外、楽しまれたようです。そうですね、また明日にでも」

兵の長は言いながら〈巫女様〉を促した。不自然な動きで〈巫女様〉は立ち上がり、小男に向けて一際強い視線を送り——右目だけで素早く三回瞬いた。

小男は、ギョツとする。

ぎこちなく歩く〈巫女様〉のその背を、兵の長が押す。
追い立てているようだった。

与えられた部屋に帰った小男は、時を待つ。たかが十名の兵とはいえ、この狭い船内で囲まれればお終いだ。

丸い玻璃が嵌め込まれた、内開きの窓を開く。生暖かい潮の香りが、ムツと流れ込む。

満月。

星を掻き消すほどの月光。

小男は帽子の中を探り、目当ての物を上着の内側に付いている袋へと移した。

起きているときは、ほぼ身に付けたままの帽子と布膜を脱ぐと、部屋を出る。

見張りはいなかった。

無人の通路を、足音を殺して歩く。

食堂を通り過ぎる。中に人の気配はない。

その先に階段があつた。数段降りて、耳を澄ませる。囁くように話し合う声。響きから察するに廊下に二人——その内の一人は兵の長——がいる。

「正午」「上々」「見張りの交代」、そして「とんだ頓痴氣」という言葉が聞こえた。

更に耳を^{そばだ}敬てる。

「しかし、この巫女様は大人しいな。毎回こうだといいいんだが」

兵の長の声だった。二人が〈巫女様〉の部屋の前にいることは、まず間違いない。

踵^{きびす}を返し、甲板へ向かった。

恐ろしいまでの月明かり。

視界に不自由はない。

帆柱にある、見張り台を見上げた。

兵が一人。幸い、反対側を向いている。

判別は難しいが、先程、珊瑚の指輪を抜かれた男のよう
に思えた。

「さっきの場所は、この下で間違いなし……つと」

小男は、見張りの向きを意識しながら、船縁に取り付け
てある柵に、用意していた透明な細い紐ひもを括くくる。

「ちと、長過ぎたなあ……」

先端が、海面に浸かる感触。

「もったいいね。ま、しょうがないか」

奇術用の、特殊で高価なものだ。小男程度の体重であれ
ば、余裕で支えることができる。

手掛かり足掛かりにする為に、等間隔に輪っかを、いく
つも作ってあつた。

こうしている間にも、疑惑はどんどん膨らんでいく。

（船底の方の部屋を貴人に？　まさか。ある訳ない。それにさっきの――）

まだ幼い小さな背を、屈強な兵の長が部屋から押し出す場面を思い出した。

普段から愛用している白手袋を、ぐつと深く嵌め直す。これがないと、この紐でたちまち掌が切れてしまう。

小男は、もう一度見張り台を凝視すると、外壁に沿って降りていった。

海は凪いでいた。

拍子抜けするほど簡単に、目当ての窓に辿り着く。

ガラス灯の暖かな灯りが漏れていた。

小男は、窓越しに覗き込む。

寝台に伏せる〈巫女様〉が見えた。コツコツと叩くと勢い良く顔を上げ、飛びつき、開く。

狭い丸窓だが、幼い頃から縄抜けを仕込まれていた小男には、頭さえ入る空間があれば問題ない。

「お前、何者だ」

入り込んだ小男は、藁色の瞳を睨む。挨拶はなしだ。

「合図が通じてよかった。きみのお仲間だよ」

〈巫女様〉はヒソヒソと答える。この、海の国の言葉ではない。小男の慣れ親しんだ、西方の言葉だ。

「お仲間って、俺はお前なんか知らねえ……って、口が利けるんじゃないかねえか！」

「シッ！」

「——ッ」

小男は全身を緊張させ、扉向こうの気配を探る。

「くすくす。大丈夫。波の音もあるし、あいつら、おしゃべりに夢中みたいだし」

真剣な面持ちの小男に向かい、藁色の瞳が緩む。親愛の情が竈^{こも}っていた。

小男は戸惑う。

「お前、何なんだよ。大体あの瞬きは、西方の売女^{ばいた}がやる

もんだろ」

「ちゃんと通じたね。ホツとした」

右目だけで、閃光のような三回の瞬き。それは女から男への【忍んでいらして】の合図なのだ。

「お前、そうか、その肌の色……この国の人間じゃないのか。だけど、あれは子供が知ってていいもんじゃないだろ」

「え、だって、きみも知ってる」

「む」

君呼ばわりはまだしも、体格のせいで同等の年齢とかわれていることを、小男は察した。

「君って言うな！ 大体俺はな、お前くらいの歳の子供が

いたっていいような」

「大きな声を出さない」

「——ッ」

「くすくす。きみ、おもしろい」

「——ッ」

小男は齒軋りする。

「きみって呼ばれるのはきらい？ でも名前を知らない」

「名前、ああ……。そんなら、お前の名前は？」

「ない」

「あ？」

「名前なんてない」

呆けた声を上げた小男を見遣り、〈巫女様〉はまたくすくすと忍び笑う。

「呼ばれていた名はあつたけど、今はもうない」

「なーんか話が変なんだよな」

「うん」

「うんじゃないだろ。俺、お前の船旅で余興をやれってこととで——」

〈巫女様〉は、泣き笑いの表情になる。小男の胸に、じわりと不安が広がった。

「何だよ。やっぱりおかしいな。お前、何か知ってるのか？」

まさかそれで俺を呼んだのか？　そんで、結局お前、この国の貴人じゃないんだな」

「アテビトって？」

「あ、その、エライ人だよ」

「エライ人にこんなことする？」

〈巫女様〉は両足を揃えたまま、パツと寝台から飛び降りた。そして小男に向き直り、足首まである貫頭衣の裾を捲まくる。

「ツツツ、いやいや、子供のくせにそんなこと……って、あ、あああッ！」

「枷かせっていうんでしょ、これ。そのくらい知ってる」

小さな膝のすぐ上に、それぞれ金属の輪が嵌められてい

た。その間を短い鎖が繋ぐ。辛うじて歩くことができる程度の長さ。幼く柔らかい肌は擦られて、赤黒く変色している。そうか。食堂を出るときの、あの不自然な歩き方は——小男は唇を噛んだ。

湧き出る感情を抑えようと、寝台に腰掛ける。

「お前、まさかそんなに小さいのに、その、う、売られたりとか……酷いことされてるんじゃないのか」

「え、違うよ。くすくす。——そっか。きみも間違えたんだ。ほら」

裾を絡^{から}げた〈巫女様〉は、そのまま両腕を高々と揚げた。足どころか、胸^あまで頭^あになる。貫頭衣の下は素肌だった。

「~~~~~ッ！」

既^{すんで}のところでで小男は拳を噛み、声を殺した。

〈巫女様〉は少年だった。

ケロツと裾を直すと、小男の隣に腰を下ろす。

「か、か、かなめさまっていったら、ふつうおんなだよなあ」

暫^{しばしば}く、口をパクパクさせていた小男だったが、漸^{ようや}く声が

出た。

「そうだけど、この国ではヒトミゴクウのことをそう呼ぶんだって。ぼくのせいじゃない」

「そうだけどさ、そうだけど——あ、お前、今、何て言った！」

「ぼくのせいじゃない」

「そつちじゃない！」

——人身御供。

小男の知識にあるのは、それが、蒙昧もうまいな大衆、邪悪な宗教、神話由来の迷信等に支えられた忌まわしき悪習ということだ。ただし、全て遠い過去に行われていたはずだった。

あるうことか人間の命を〈神〉に捧げ、代わりに恩恵を乞う。例えば百人の幸せの為に、一人の命を犠牲にする。

一人の命が百人の身代わりとなる。

どういう人間が選ばれるかは、その国々や〈神〉によつ

て異なる。目立つ例は罪人や託宣たくせんで決められた者だが、へある特徴をを持つ者と定めている場合も少なくない。

その一人に選ばれることが、大変な名誉になることもある。必ずしも強制だけではなく、果ては志願したり——嘗かつて、そのようなことが罷り通まかつていたらしい。

育った国でも、通り過ぎてきた国々でも、書物や伝説からそれらの知識を小男は得ていた。直近に行われていた話など、風の便りにも聞いたことはない。

この国は違うのか。

街並みや服装は特殊ではあるが、際立って清潔で、野蛮な印象はなかった。それどころか、この帆船の造りや窓に

嵌められた丸い玻璃など、西方に並ぶ高度な技術さえ持っている。

なのに現在^{いま}、人身御供の風習があるというのか。

「この先の海に、カイリュウシンがいる渦があるんだって。一年に一度、必ずキレイな余所者^{よそももの}をヒトミゴクウにするんだって。ぼく、キレイなんだね。くすくす」

少年は忍び笑う。

「ぼくは、身代わり」

「——身代わり？」

「ずっとずっと、ぼくを守ってくれてた人の、身代わり」

身を乗り出す小男から、そつと顔を背^{そむ}け、少年は身の上を語り始める。

ろくに食べ物もなく、いつも寒かった。

硬い床に薄い毛布。少年の最初の覚えは、その部屋から始まる。

十^{とお}歳に満たない子供ばかりが十人足らずで、昼も夜も知らずに過ごした。

時折大人が呼びにきて、誰かが部屋から連れ出される。

戻ってくるときもあれば、戻らないこともある。たまに新しい子供が入れられる。

戻ってきた子供が、外の様子、外で起きたこと、外で覚

えたことを話す。ときにどんな目に遭ったかさえも。

聞きながら、あんたん暗澹たる気持ちになる。だがここでは、その語られることが唯一の娯楽と学びだ。

幼過ぎた為か、少年に声が掛かることはなかった。

物心付いたときには、一人の少女が常に少年の側にいた。少女は優しかった。

食事のときにはこっそり一口、自分の分から分けてくれた。夜は少年を胸に乗せ、自分は冷たい床の上に寝た。

少女も藁色の髪と瞳の持ち主だった。そこには鏡などなかったが、とてもよく似ていたらしい。

皆には、二人は姉弟ではないかと言われていた。きょうだい

「だから、ねえさんって呼んでた」

ある日、少女は外へと連れ出された。子供を出し入れするときにだけやってくる、唇の色の悪い酷薄こくはくそうな男のじつとりとした笑顔が、扉の隙間からチラと見えた。

少女はすぐに戻ってきた。

「異国の人みたい。何を話しているか全然分からなくて、とても怖かった。私をじろじろ見て、何度も頷いてた」

少年は少女の怯えに応えようとした。何もできないに等しいのだが、せめて寄り添おうと。

ところが、あの唇の色の悪い男がやって来て、二人を引き剥がした。

「お前に、役に立つてもらおうときがきたんよ」

男は、熱いお湯で少年の身体を洗いながら、これからの身の上に付いて事細かに説明する。

「人身御供って知ってるか？ 知らんよな。いつつも、あの部屋から出してんだけど、二度と帰って来んもんな。そりゃ知らんよな」

理解の鈍い少年を、いたぶ甚振るように続ける。

人身御供とは何なのか。海の国の風習とは。

これから何処へ連れていかれ、どんな扱いを受け、
いつ、どのようにして殺されるのか。

「お前は身代わりなんよ」

物を知らない少年にも分かるよう、噛んで含めるように言いつのる。生まれてこの方、こんなにも長い時間人の声を聞かされたことは、少年にとって初めてのことだった。散々喋り倒し、男は満足したらしい。気味が悪い程優しい手つきで少年に新しい服を着せ、言葉の通じない異国の男に引き渡した。

「そのまま変なでかい箱に乗せられて、この国まで来た。ぼくがねえさんじゃないってバレたのは、この船に入る前の日だったよ。何言ってるかはさっぱりだったけど、もうひどい騒ぎだった。くすくす。アレ、おもしろかったな」しかし小男は、深刻そうに問う。

「その、身代わりつてのは」

「ぼくは、ねえさんの身代わりにされたんだ。でも、それで良かった。ねえさんがヒトミゴクウとか枷とか、こんな目に遭うなんて、そんなのイヤだ」

「……ああ、そうだな」

相槌は打った。だが小男の胸の内は、穏やかではない。

——その身代わりというのは、恐らく少女を売るのを惜しんだ為だろう。少女にとっては、寧ろ^{むし}ここで死んでいたほうがマシだったという結末が、既に用意されているのかもしれない。

少年の話を聞きながら、小男は自らの最古の記憶に思いを馳^はせる。

気が付けば、箱の中にいた。

地下室だったのだろう。天井近くに明かり取りの小さな窓が、ぽつんとあった。そこで頭だけを外に出した格好で、小さな箱に詰められていた。

蒸し暑くて、顔に髪の毛が張り付いて、ジラジラとして。痒^{かゆ}くて痒くて堪^{たま}らなくて、どうしても掻くことができなくて気が狂いそうだった。

箱の中でも四肢は何かに拘束されていて、汗で蒸れた身体がやはり痒かったが、顔面が一番辛かった。

せめて固定されている首を振ろうと、必死にもがいた。

小さな窓から見える草の葉の緑が、辛うじて箱の中の小男の正気を繋ぎ止めていた。

その地獄は唐突に終わる。

箱ごと部屋から連れ出され、ごちゃごちゃとした荷と一緒に積まれ、何処かへと運ばれていった。

そして、箱から出された。

固定され続けていた四肢は萎^なえ、動かすことができなかった。剥き出しの世界は寒く、箱という鎧を失ったことに絶望さえ感じた。

それからが、新しい地獄だった。

萎えた身体を鍛える為と、泣こうが喚わめこうが鞭を振るわれ、這い回ることを強制された。

立つことができるようになると、幸か不幸か、後の回復は早かった。

歩き、駆け、跳び、舞う。並の子供には不可能な程の、人というよりは獣に近い動きを仕込まれた。

できない。怖い。許してください。

そんなことを言おうものなら、いや、ほんの僅わずか目の端に表しただけでも、鞭が飛ぶ。

「いつでもあの箱に戻してやるぜ」

養い親を自称する大男は、呵か々かと嗤わらった。

自分が入っていたその箱は、見世物の小人を造る為のものだと、とつくに教えられていた。

「小人ってだけじゃ、高く売れねえ」

その養い親は子供を安く買い叩き、芸を仕込んだ後に転売するのを生業なりわいとしていたのだ。

蜻蛉とんぼがえ返り、綱渡り、空中鞆ぶらんこ、縄抜け、水中脱出。

何でもやらされた。

疲労の余り吐き下すことも、日常だった。

「道化は駄目だな、お前には華がない」

芸を一つ勘弁されて嬉しい筈だったのだが、何故だかとても悔しかった。

養い親は「箱入り」と小男を呼び続けた。

ひよつとしたら、それが名前なのかもしれない。そう思うと、喉を掻き^{むし}き叫びたくて堪らなくなつた。

絶叫を耐えるのが限界になつた夜、小男はそこから逃げ出した。

「よし」

小男は、立ち上がる。

「助けてやる」

「え」

「逃がしてやるよ」

ハツと、少年は顔を上げた。小男は、頼もしげに微笑んでみせる。

「俺に任せろ！」

グツと親指を立てて、己の胸を差した。

少年は、言い難そうに口を開く。

「ん、あの、ヒトミゴクウになるのって、ぼくだけじゃなくって。きみも……なんだけど、あの、気付いてなかった？」

この海の国では西方からやって来る異人を、人身御供として海龍神に捧げる風習があるのだという。

その事実は噂となり、ちよつと気の利いた旅人ならば、

この国に立ち寄ろうなどと考えることもない——そうだ。

その為、最近はわざわざ人身御供を「買い付け」ている。少年が育ったのは、そういう店でもあつたのだ。

小男は思い出す。昔、何処かで読んだ書物に、人身御供には特に異能の者が好まれると記されていたことを。

分かりやすいところだと、ずば抜けて美しい少女、特別な知識の持ち主、戦いに長けた勇者。

少しずれるが、小男も充分にその資格を備えている。不思議な技能の振り手、且つ、大人でありながら子供の身体を保つ者として。

神へ捧げる、珍しい御馳走ごちそうという設定なのだろう。

——あそこに逃げ込んでしまえば、もう追っ手が掛かることもない。

——沢山の訳ありな奴らが、あの国へ行つたものだ。

旅の途中、酒場や安宿で囁かれていた言葉が蘇る。そういう奴らは今、どうしているのだろうか。

小男はそれを、この国の何処かに居場所をなくした者らが、ひっそりと暮らす土地があるに違いないと……、安寧^{あんねい}の地があるものだ、そればかり信じていたのだ。

まさか、当世に人身御供などという風習が生きている国があるなどと、夢にも思つたことはない。

だが、詳しい話を聞いた今、あちらで仕入れてきた話に

危険を感じなかつたことが迂闊過ぎたと、自分が愚かだつたと——小男は無言で認める。

さつき盗み聞いた「とんだ頓痴氣」。あれは——兵の長の声だつた。

小男の頭に再現される、宿の前の群衆、道行の群衆、港で見送る群衆——湧きあがつた哄笑。

大仰な祝福。小男の命と引き替えに、海龍神の加護が保証されるのだ。どんなに喜ばしいことだつたろう。

兵の長が示した、あの琥珀。あの見事な琥珀！

「くそつ。くれてやるつもりなんか、最初からなかつたんじゃないか」

「ぼく、言葉は分からないけど、あいつらの身振りや態度で分かったんだ。ほら、ぼくが女の子じゃなかったからさ、きみを足して、何とかしようとしてるみたいだなつて。くすくす」

「くすくすじゃねえだろ！」

「だって、ぼくが気付いてるのに、肝心のきみが気付いていないなんてさ」

「いや……ああ、——う」

小男は今更ながら、群衆や兵達の過剰な殷懃^{いんぎん}さを思った。そして。

——とんだ頓痴気。

「うわあああああああ」

拳を噛み締め、声を抑える。悔しさよりも恥ずかしさが先に立つ。

——俺、手なんか振ったりしてさ。振っちゃったりしてさ！

「まあまあ、過ぎたことは仕方がないよ」

「お前が言うなッ」

「あのね、ぼく、聞いたんだけど、間違っても生き延びることがないように、ノドを切ってから海に投げるんだ」

「絶対死ぬじゃないかああああ」

「ぼくを怒っても」

「……そんな大事なことは、最初に言ってくださいよ」

「知らないのかな、とは思ってたんだけど。なんかヒトゴトっぽかったから。『助けてやる』なんて」

「あああ、そうでございますかッ。それはすみませんでしたね！ で、その儀式とやらは、いつなんだ？」

「満月がきて、次のお昼って聞いてたから、明日かな。お日さまが真上にきたとき」

「二日ないのかよおおお」

小男は頭を抱え込む。

暫く黙っていたが、やがて白らを奮い立たせるように拳を握り締めた。

「いや、絶対に助ける。俺もお前も助かる！」

「どうやって？」

少年は小首を傾げ^{かし}、冷めた目を向ける。

「ココ、海の上でしょ。海くらい、ぼくだって知ってる。足がこんなだし、水に入るなんてムリ。それに『フカ』って人食いざかなが、うようよしてるって聞いたよ」

「^{ふか}鱻？ この辺に鱻がいるのか？」

「カイリユウシンさまの、お使いなんだって」

「……はあ、そうでございますか」

小男は再び頭を抱え込む。

しかし、すぐに少年に向き直った。

「万が一のときの為に、小舟か筏^{いかだ}が積んである筈だ。そい

つを戴く」

服の上から、膝を戒^{いまし}める枷を握り、少年は項垂^{うなだ}れた。

「どうやって？　ぼくはこの部屋からだって出られないんだ。きみはその窓から出られるけど、ぼくはムリ」

「俺に策がある。上手くいけばその枷が外れる。そしたら、俺のところまで走ってこい。駄目だったら、迎えに行く。

俺が抱えて走る。言う通りにすれば大丈夫だ。手を貸せ」

「ウソばかり。上手いこと言って、アレだ、ぼくを、お、お、

お？　——何だつけ？」

「……^{おとり}化」

「そう！　オトリにして、自分だけさつさと逃げるんだ。

きみみたいなのを、ペテン師っていうことくらい、ぼくだつて知ってる！」

「ペテン師？」

「そう！ きみはペテン師だ」

「——お前さ、キッツいくらい鋭いな。ああ。俺はペテン師だよ」

小男は何度も頷き、続ける。

「何処に行つても、皆、最後には俺のことをそう呼ぶんだ。……そう呼ばれたときが、俺の逃げ時^{どき}だったしな」

そして少年を、真正面から見据え、言い切る。

「ああそうだ！ 今が逃げ時なんだ。ついでだからお前も

逃がしてやるよ」

じょうぜつ

饒舌に捲くし立てる。

「俺はな、ずっと同じことの繰り返しで生きてきたんだ。面白い技で、キレイな言葉で、いろんな人を楽しませてやった。だけど、それも最初だけなんだ。いつも最後は——」

例えば。貴族の幼い子供が、小男の空中遊泳に心を奪われた。無邪気に真似ようとしたその子供は、父親の外套がいとうをこつそり羽織り、屋根裏部屋から飛び降りて大怪我をした。彼はもう二度と歩けない。

例えば。豪商の一人娘が、小男がわざと奇術を失敗するときに作る気弱そうな笑顔に惹ひかれた。勝手に心を捧げて、

叶えられぬ恋に勝手に壊れた。小男は、彼女を個人として認識さえしていなかった。彼が知らない間に、全ては始まり、終わっていた。

例えば。村の名士が、小男が語る異国の話にのめり込んだ。もつと話が聞きたいと財産を処分し、与えようとした。それで家族がバラバラになった。本来、曝す必要のない浅ましい姿を、皆が剥き出しにして恥じることもない有様だった。名士は憤死した。

どれも、小男が望んだことではない。

だが、全ては小男だけのせい^{のし}にされ、ペテン師と罵られ、石もて追われた。

いつもいつも、その場所で一番価値のあるものを奪う形になった。意図したことではなかったが、必ずそうになった。代わりに、小男は一番欲しいもの——居場所——を失い続けた。住処^{すみか}という意味だけではない。誰かの心の片隅にさえ、彼の居場所は与えられなかった。

そうしてついには、この国まで流れてきたのだ。

……もし運命というものがあるのなら、この繰り返しが正に——やめろ、それどころじゃない！

小男は空回る思考を振^ねじ伏せた。

「よし。俺のことはペテン師って呼べ。お前のことは……そうだ、身代わりって呼ばせてもらおうか。何か呼び名がな

いと面倒だからな」

「うん。それ、ぼくにぴったり」

少年の声が弾んだ。

「よし、最後にもう一度、手順を言うぞ。俺が出て行つてから、ゆつくり三百数えるんだ。ゆつくりだぞ？　そして、その玻璃灯を寝台に投げる。布団に火が移ってから、椅子かなんか倒して大きな音を立てろ。それで見張りが来る筈だ。そのままお前をこの部屋から連れ出すだろう。なに、事が火だ。間違いなく甲板に出す。人身御供にするまでは、お前に死なれちゃならないんだからな。それを逆手に取る」

小男は、少年に繰り返し教えた手筈てはずの、最後の念押しをする。

少年は、神妙な面持ちになる。

「——じゃ、俺は行くぞ」

「あ、あの！ まって……」

小さく叫び、少年が縋すがるように手を伸べる。

その痩せた手を掴むと、小男はギュツと力を込めた。

「大丈夫だ。俺を信じろ」

「……あの、そうじゃなくて、その、ぼく、そんなにたくさん数えられない」

足掛かりの紐を、小男は少年に示す。

「これを強く引く。それが合図だ」

少年は頷いた。

「では！ 身代わり君よ。また後程」

小男は頷き返し、手を挙げた。

甲板に戻った小男は、注意深く辺りを探る。潮の音だけが響いていた。

帆柱の上の見張りは、今も反対側を向いているようだ。

いつしか、雲がちらほらと出ていた。これが味方してくれれば——小男の視界も効かなくなる代わりに、敵の視界

も奪つてくれる。

緊急用の筏は、船尾から、海へと突き出す形で固定してあつた。^{かい}櫂もある。

小男は持っていた小刀で、固定してある荒縄に適度な切れ目を入れる。これで体重をかけて蹴り出せば、海へと落とせる筈だ。

そこに少年と自分も飛び込んで、這い登ればいい。あのくらいの子供なら、きつと引き上げてみせる。夜に紛れて、きつと逃げられる。

とにかく、この船に乗っている限り、明日の今頃は確実に——生きてはいないのだ。

小男は紐の場所に戻ると、それを引く。紐は上がってはこない。少年が、しつかりと端を掴んでいるのが分かった。合図が伝わったことを確信する。

「つと……、どうすっかな」

高価な上に、辺境では手に入らないこの紐を、一瞬、小男は惜しんだ。しかし、見張りがいつ、こちらを向くとも限らない。回収を諦め、白室へと急いだ。

少年は窓の外に腕を伸ばし、小男が残していった紐を握り締め、集中している。

「――っ」

掌の中のそれが引かれた。鋭い痛みが走るが、幸い切れ
てはいない。

弾かれたように、動く。不自由な膝をものともせず玻璃
灯に飛び付き、勢い良く寝台に投げた。

そのまま少年は倒れ込む。期せずして大きな音。

「何だ、何事だ」

兵の長が扉を開く。

寝台から焰ほのおが上がっていた。

大事な人身御供が、床に転がっている。

「なっ——！ 水、水だ！ いや、まずは、こいつをここ
から出さねば」

兵の長は、共に見張りをしていた兵を呼びつけた。持っていた鍵で、少年の膝の枷を解き放つ。

「走れ、急げ！」

自室に戻っていた小男は、扉のすぐ傍にしゃがみ込み、耳を澄ましていた。

「水、水だ！」

そんな怒鳴り声が、微かに聞こえる。

玻璃灯の油が染みた寝具が燃えているのだ。しかもあの小さな窓からは、満足に海水を汲めやしない。そう簡単には消せないだろう。

やがて荒々しい気配と物音。複数の人間が走ってくる。

「急げ、もたもたするな」

兵の長の声と重厚な足音、それに隠れるように軽い足音が、小男の部屋の前を通り過ぎていく。

十分に遠ざかったことを確認し、小男は部屋を出る。

「寂しいねえ。俺のことも気遣ってくれよ」

今度は、帽子と布膜を身に付けていた。

再び甲板に出る。月は薄雲に覆われていた。

見張り台には人影はない。この騒ぎだから——と小男は理解する。

兵の長が指揮を取り、皆に水を汲ませていた。四、五、六

人、残りは火元にいるのだろう。

小男は素早く、物陰に隠れる。

あの少年は——いた。慌ただしく動き回る兵達から離れ、一人、所在なげに立っている。

幸い、その顔が小男の方を向いていた。

兵達は、桶を抱えて火消しに走る。少年の見張りの為だろう、兵の長だけが甲板に残った。

今だ。

小男が合図の手を振る。

少年は、それに気付く。

一瞬、怯んだかのように見えたが、少年は走り出す。よ

ろよろと、しかし一直線に駆けてくる。

兵の長が振り向く。

「よし、こっちだ」

小男が手を差し出す。少年はそれを取ろうとし——小男の背後に目を向け、ぎくりと固まる。

小男は、本能的にしゃがんだ。

バチイッ！

背中で、金属が爆^はぜる音。

発条が——小男の布膜に仕込んであつた発条が、弾け飛んだ。

背後から、いつの間にか忍び寄っていた兵が、斬りつけ

たのだ。しゃがんだ拍子に翻った布膜が犠牲になった。

「しまった！」

小男は振り返る。

珊瑚の指輪のあの兵が、小男に剣を突き付けていた。

あときは笑い合った彼が、今、殺気を顔に小男にたいじ対峙

する。

「あ」

小さい悲鳴に、小男は再度振り返る。

少年が兵の長に抑えられていた。

思わず駆け寄ろうとした小男だが、反射的にその場から

退く。

珊瑚の指輪の兵が、剣を振り回してきたのだ。

「それ、それ、観念しな」

小憎らしい笑みを浮かべ、小男を追い立てる。

「う、や、おつとつと——と」

たちまち追い詰められた小男は、船縁に飛び乗った。

少年と目が合う。

兵の長は少年の首に腕を巻き、やはり剣を抜いていた。

「……身代わり」

思わず呟いた。その隙を狙い、珊瑚の指輪の兵の剣先が、

小男の足元を薙ぐ。

「あ、わ、うわ」

均^{バランス}衡を崩した。大きく重い帽子が仇^{あだ}になり、そのまま身体が引つ張られる。

——海に向かつて。

「ペテン師！」

少年の声。

小男はそのまま、真^まっ逆^{さかさま}様に夜の海へと落ちていく。

見開いた眼に映るのは、何かを掴もうとくねる己の手と、空。

雲が切れ、煌^{こうこう}々と輝く月。

どぼん！

視界が歪む。

一拍ほどの間を置いて、頭部に水の感触。

帽子は小男から離れ、ゆつくりと沈んでいく。

目が、耳が、鼻が痛い。

水面の天幕に、揺れる月光。

何かを掴もうと、くねる己の手。

——空。

「……う」

少年は、目を覚ます。

頬に激痛。

手をやろうとしたが、動かせない。

「なに？ あ」

後ろ手に縛られていた。

記憶が甦^{よみがえ}る。

——小男は、船縁から転がり落ちた。

後を追おうと、首に絡んだ太い腕に噛み付く。しかしあつけなく引き剥がされ、強烈な拳を顔面にお見舞いされた。

痛みを感じるより先に、少年は意識を飛ばし——。

「う」

意識を取り戻したことを後悔した。

手首を固定しているのは縄のようだが、膝にはあの忌々しい金属の枷の感触がある。

俯せうつぶせになっている床一面が水浸しだった。口中が塩辛い。血なのか、それとも海水なのか、判別が付かない。

塩水が沁みているせいもあるのだろう、殴られた頬は熱を持っている。

「つしよと」

反動を付けて、仰向く。

焦げ臭い。

そこは少年が元々閉じ込められていた部屋だった。
焼け跡が残る寝台が目に入る。窓には錠前が掛けられていた。

青白い空。直に夜が明ける。

少年は溜息を吐いた。頬が、手が、膝が痛い。その何処をも庇うことすらできない。

(ま、いっか。もうすぐ死ぬんだし)

自嘲。

——ペテン師は海に落ちた。ちよつと予定より早かっただけだ。ノドを切られなくてよかったね。僕も、切られたくないな。きつと、これより痛いんだろっな。

少年の瞼が降りていく。
まぶた

その薄い皮膚が降りきる間際、窓の外を何かが過ぎつた。
瞼を開け、首を上げる。

——コツン。

硬質な音。

——コツン。

握り拳。

少年は、身体を起こす。

玻璃を、今度はもつと大きな塊が覗き込む。

「ペテン師！」

少年は寝台に飛び乗った。勢いで、腫れた頬が玻璃にぶ

つかる。

窓の外には小男の顔。

身代わり、身代わりと、青褪あおざめた唇が形を作った。

「生きて……」

少年は、それだけを口にする。

小男は上腕に絡み付かせた透明な紐を示した。そして自由な方の手で、もう一度玻璃を叩く。開けてくれという意味らしい。

「カギが」

少年は顎あごでそれを差し、頭かぶりを振った。

何だって、と、小男の唇が動く。

しかし、すぐに少年をキツと見据え、ゆっくりと力強く頷いた。

少年も頷き返す。

「ぼくね、信じてる」

口をついて出たその言葉に、少年自身が驚いた。

小男は一瞬遅れて目を見開く。

「そんなに驚かなくても」

無事なほうの頬も赤く染め、少年は語気荒く反駁はんぱくしたが、すぐに勘違いだと知る。

「ペテン師！」

小男の姿が、スツと、玻璃の外から消えた。

夜が明ける直前、見張りの交代が行われた。

珊瑚の指輪の兵は、人身御供の儀式までの数刻、眠ることを許される。

代わりに、この船で一番年少の兵が見張り台に登った。白く、明るく変わる空。夜が去ってゆく。

遠景に異常はないが――。

目の端で何かが光った。船尾に近い船縁だ。

その兵は、すぐ行動に移った。

億劫おっくうがらずに帆柱から降りて、確認に走る。

船縁にある柵に、透明な紐のようなものが括りつけられ

ている。こんなものは初めて見た。

海面を覗き込む。

「――あれは！」

海の藻屑と消えた筈の外国とつくにの奇術師が、その紐に身を預けていた。

「いつの間にこんな仕掛けを。抜け目ない奴だ」

早速、紐を手繰たぐる。驚く程に硬いが、手甲を嵌めているので楽に扱えた。

小男は暴れるかと思いきや、無抵抗に上がってくる。

「そうれ！」

掛け声と共に、小男の身体が柵を越えた。

「あ、あれ」

年若い兵は自分がぶら下げているそれを見て、顔色を失った。

小男は右腕と上半身を、透明な紐に絡めている。左腕は支えなしに揺れていると見えだが、それは中身のない袖だけだ。首は折れそうな角度で曲がっている。瞼も唇も、ひっそりと閉じられていた。

襟元から垂れた、切れた発条と布膜の残骸が、その半身を覆っている。上着の裾は頼りなく下がり、そして、その先にあるべき腰から下が——消えていた。

兵は、感慨深そうに呟く。

「鱻に……やられたか。せつかく助かろうとしたのにな。お使い鱻にやられたってことは、どの道、捧げ物になるのがお前の運命だったのさ」

徐々に近付く足音。

——来た。

少年は目を開ける。眠っていた訳ではない。

天井から窓へと視線を流す。丸く切り取られた青い空。他には何もない。

海水をたっぷり吸い込んだ寝台に横たわったまま、時を迎えた。焦げ臭い沼で寝ているようなものだった。

しかし、少年にとって、快不快など既に問題ではない。傷口に沁みる塩水が刺激する痛覚も、意識をしつかりさせる手段に利用していた。

心を、揺らがせないように。

最後の最後まで、揺らぐものかと沈黙のうちに誓いを立てる。

カツと踵かかとを鳴らし、足音が止まる。耳障りな金属の擦れる音。鍵が外されたのだ。

「時間だ」

兵の長の宣告と共に、扉が開く。

少年は、甲板に引き出された。

遮るもののない直射日光が、長年薄暗がりに慣れた瞳孔を刺す。陽光から逃れる為、瞼を閉じた。

風が強い。藁色の髪が揉みくちやになつた。濡れた毛先が、腫れた頬に張り付く。

頭を振つたが、剥がれない。痒い。手が使えないことは、こんなにも辛いのか。

船は、海流が激しくぶつかり渦を作っている場所から、ぎりぎり巻き込まれない際きわに錨を下ろしていた。この辺りの海は深いが、この付近だけ海底が隆起している為、錨が役に立つ。

舳先へさきから僅かでも進めば、渦へと向かう海流だ。停泊しているここは、丁度その流れに逆らっている部分だった。狭い海峡に挟まれ、轟々ごうごうと回転するそこには古くから海龍神の伝説がある。

この海を――、海の国を守るもの。

いつ何時攻め込んでくるか分からない、西方の異人を人身御供として捧げ、その味を覚えさせる。

要は海竜神が、この海を行く西方人を襲い、喰らうように躑つけている――それがこの儀式の真意だ。

しかし、実際には海龍神などいない。

そもそも渦潮は海龍神ではなく海流が原因の――などと

正論を吐いても、現にこの光景を目の当たりにすると、畏怖の念が先に立つ。

少年は瞼を開いた。藁色の瞳が、荒ぶる渦を映す。

あそこには、今日までいったい何人の身代わりが、吸い込まれていったのだろうか。

兵の長は少年の後に付いている。

万が一にも逃さない為の立ち位置だった^が、驚く程素直に少年は歩いた。

兵の長の心中に、^{しんちゆう}あの小男が浮かぶ。

いや、あいつは間違いなく海に落ちた。少年に掛かりき

りだった自分だが、落水らくすいの音は聞いている。兵の一人は、その瞬間を目撃している。

居並ぶ八人の兵を視認する。皆、帯剣している。体格も立派だ。

帆柱に目を上げた。帆は全て畳まれている。丁度真上にある太陽に邪魔をされ、見張り台の兵は黒い塊にしか見えない。

あそこには生真面目な、一番年少の兵を配置した。些細な異常でも、大声で知らせてくる筈だ。

もし。

もしも、あいつがここに来たとしても、何もできない。

もう一度、帆柱に視線を流す。

「ん？」

微かな違和感。

しかし、今は儀式の遂行に集中すべきだと、兵の長は前を向いた。

淡々と、船首に足を進める少年が薄気味悪いが、どうせ何もできないと判じた。

兵の長は少年の前に回る。両側に各々四名の兵が見守るように並んでいた。

兵の長は、これから少年の細い喉を即死しないように加

減して裂く。

両手足を縛いましめているとはいえ、ここは海峡だ。陸地は直ぐ傍にある。用心に用心を重ねてのことだ。

絶命するのは、あくまでも海に投げ込んでからでないと、人身御供の役は成さない。

兵の長は呼吸を整える。

もう幾年、同じことを繰り返してきただろう。

罪人で練習もしている。

仕損じたことはなかった。

「押さえる」

命令された兵達の動きは硬い。緊張は隠せない。

兵の長が宝玉で飾られた専用の刃を抜こうと、その柄に手を掛けた、そのとき。

ぶんッ！

何かが唸った。

風を切る音。

音がしたとき、全ては手遅れだった。

兵達は少年だけに集中していた。

兵の長は少年の喉笛を見つめていた。

逆光の見張り台の異変になど、気付く者はいない。

少年の背中へは、がら空きだった。

見張り台から飛んできた塊が、その勢いに任せて少年を吹き飛ばした。正面にいた兵の長は、少年から頭突きをもらう形で甲板に叩きつけられる。

両脇の兵達は素早く伏せつつ、少年と共に空を舞う何者かを目で追った。

「あ、あいつ」

「まさか！」

口々に、驚きを顔にする。

それを耳にした兵の長は、後頭部を摩さすりながら半身を起こす。

ぶんツ！

背後からのその音に振り返ることはせず、慌てて頭を低くした。

そして見た。

死んだ筈の小男が、少年と共に空を飛び去っていく。

奇跡の技を？

否、そんなことがあるか。兵の長は目を凝らす。

小男の両手は、見張り台から長く伸びた縄を掴み、両足は少年の胴体をしつかりと絡め取っている。

と、少年の身体が宙に放たれた。

絶妙の間合いで小男は縄を離し、甲板に降り立つ。そして、辛くも少年を抱き留めた。

「待たせ——」

「痛いよ！」

顔を見合わせた瞬間に、二人は同時に口を開く。

「うるせえ！ あれしか方法がなかったんだよ。……その、ヤツにぶつけるつもりじゃなかったんだ。ワザとじゃ」

「でも、ざまあみろだったよね」

「あはは、まあな——つと、話は後だ」

小男は、少年を回れ右させた。素早く、後ろ手に縛る縄

を切る。焦っているせいで、少し皮膚まで切れた。

「ッ、悪い」

「いいよ。でも、足はダメ。枷が」

「チッ。よし、おぶされ」

「え」

「え、じゃねえよ、急げ」

こうして並んで立つと、小男の矮躯がよく分かる。しかも少年の膝は開かない。背負うといつても——少年が戸惑う最中、^{さなか}兵の長を始め、皆が体勢を整える。

「早く！」

小男が背を向ける。

少年は、思い切って身体を預けた。

兵の長が先頭を切り、こちらへと駆けてくる。

小男も、迎え討つようにその方へと走る。

少年は面食らう。だが、すぐに思い直す。

ペテン師は、助けると約束したのだ。

驚いたのは少年だけではなかった。

兵の長も、突進してくる小男に尋常ではないものを感じ

た。思わず、足が緩む。

その僅かな隙を、小男は見逃さない。

武器もない。力もない。常識的な退路もない。

自分にあるのはペテンだけだ。

「だああああああああ」

腹の底から叫ぶ。

——だけど、ペテンがペテンでなくなるときが、そろそろ来たっていいんじゃないか？

叫びながら、帆柱に飛び付いた。

少年を吊り下げたまま、猛然と登る。梯子状の細い足場。どちらも小柄とはいえ、指先や足先に二人分の体重が伸び掛かる。脂汗が吹き出る。

「あああああああッ！」

小男はそれでも叫びながら、見張り台に辿り着いた。中

には、白い分厚い布がたっぷりと敷き詰めてある。

少年を促し、先に囲いの中に押し入れると、長く垂れた
ままだった縄を引き上げた。

「貴様ら！ 逃げたつもりか」

兵の長が真下から叫ぶ。帆柱をぐるりと、兵達を取り囲む。
息を切らし、這うようにして囲いに潜り込んだ小男だった
が、何とか呼吸を整えると、ヘラッと顔を出し、手を振った。
「おい、俺がここにいてことは、な？ ここにいる筈の
お前らのお仲間は、さあて、何処にいるのかなあ？」

「！」

「あはは。あそこだよ！」

小男が差す先を、兵達が一斉に振り返る。目を凝らすと、陽光に光る何かがあつた。

「お前、見てこい」

命じられたその兵は生唾を飲み込み、手摺から乗り出した。
「うわッ」

そこには、本来見張りをしている筈の、一番年少の兵がいた。柵に結わえられた、硬い透明な紐一本に支えられ、惨めに揺れている。黒い布で猿轡さるぐつわを嵌められ、手足を身体の前で一つに纏められたその姿は、狩りの獲物のようだ。

「生きています！ 早く引き上げないと。誰か、手伝ってくれ」

「あはははは、良かったな。鞆は楽しかったかい」
兵達には全く通じないだろう、生国しょうごくの言葉を浴びせる。
もう、この国の言葉は使わない。

少年は鞆を知らなかったが、吹き出した。こんなに痛快な気分は、生まれて初めてのことだった。

——あるとき。

少年に、窓越しに語り掛けていた小男は、見張りの兵に引き上げられた。

己の意に反して、ぐんぐんと上昇させられる事実を肝を冷やしたが、すぐに一計を案じる。少年から聞いたばかり

の、鱧の話が閃いた。

「鱧に……やられたか。せつかく助かろうとしたのにな。お使い鱧にやられたってことは、どの道、捧げ物になるのがお前の運命だったのさ」

その言葉が終わると同時に、小男は開眼する。

「ナメんな！」

ぶら下げられているのは好都合だった。反動を付ける。限界まで反らせた両足を抑えていた、左手を放した。

兵の反応が遅かったことは、責められない。小男が周到だったのだ。

両爪先が見事、柔らかな顎の下に決まる。

何が起こったのか理解する間もなく、兵は昏倒した。

「鱧の餌なら、お前がなれ」

小男は物騒な口を叩くが、そんな気は毛頭ない。

腕に絡ませていた紐を使い、意識のない兵を慣れた手つきで拘束した。そのまま船の外に釣り下げる。

「よし。……まあ、どうなることかと思っただけだな」

濡れた身体に、潮風が冷たい。体温が奪われていく。

「風が……」

明け掛けた空を見上げる。

雲の流れ方が早い。

「運命か」

真顔で呟き、船尾に向かう。

ずっと一緒だった帽子をなくした。

壊れた布膜は剥ぎとった。

透明な紐も、使い切ってしまった。

残ったのは、小刀。そして自分自身。

足先から、ぐつと冷える。靴もなくしていた。

だが、腹の底は熱かった。

「この分だとあいつら、銃も弓矢も持ってないな。よし。

……おい、今のうちにこれ手伝え」

小男は荒縄を差し出す。先程ぶら下がっていたあの縄を切り分けたもので、これは船の備品を失敬したものだ。

「なに、これ」

「手本を見せるから、この通りに俺の手を縛れ」

小男は縄を取り、自らの足首に結び付ける。奇術用の特殊な結び方だ。

少年は記憶しようと、懸命に凝視する。

「いいか、これをこう持ってきて、な？　じゃ、こっちの足でもう一回やるから……、こう、こう、な？」

少年は、こくこくと小刻みに頷く。

命拾いした一番年少の兵は、酷い船酔い状態だったが、すぐに立ち上がる。屈辱に滾り、帆柱へ突撃することを、兵の長へと申し出た。

「どうかご命令を。直ちに、あいつらを引き摺り下ろして御覧に入れます」

「慌てるな」

兵の長は一喝した。

「よく考えろ。向こうは二人だ。こちらは一人ずつ登るしかないんだぞ。あの高さから落とされれば事だ」

「そんなことにはなりません！ 私達は訓練された、謂わば

国の精鋭ではないですか。あんな外人どもに劣りはしない」

「冷静になれ」

「ですが、儀式の時間が……」

「時なら、もう過ぎた」

兵の長は、冷徹な声で言い放つ。

兵達、皆が、太陽を振り仰ぐ。すでに真上を過ぎ、ほんの僅かだが西へと傾き始めていた。

「——ならば、儀式は」

珊瑚の指輪の兵が言い掛けたが、兵の長に睨みつけられ、それ以上を慎んだ。

「例え遅れても、何もしない訳にはいくまい」

兵の長の拳が震える。

「よし。上出来だ」

小男に褒められ、少年はホッと表情を緩める。

暫しの沈黙。

風が強い。

海峡より吹いてくる風だ。

「最後に訊くぞ」

小男は、少年に問う。

「ここで殺されるか、俺と一緒に死ぬか。どつちかしかないとしたら、どつちにする」

「いっしょに生きる」

少年は、即答した。

「生きるう？　生きる可能性なんか、殆どほとんどないぞ。風が何処まで味方するか分からない。発条なしの布で、しかも二人だ。高さだつて足りない。そもそもこんなことは、やつたことないんだ。あいつらの前にドテツと落ちて、はいオシマイ、つてことになるかもしれないんだぞ。で、気楽に言うてくれるけど一緒に？　この上、お前の面倒を見ろつてか」
「いっしょに生きよう」

少年は笑った。

例の忍び笑いではない。

「生きてどうする？」

「あのね、ぼく、ねえさんに会いたい。いつしよに、ねえさんのところに行こうよ」

小男はそれには答えず、背を向けた。

「俺の背中に、仰向けに乗れ」

「あおむけ……って、ぼくが上を向くってこと？」

頷き、小男は、自らの手首に結ばれた縄を示す。

「お前もこれを握れ。俺が右を引いたら、お前も同じように引く。俺が緩めたら、お前も緩める。左も同じだ。多分、一人の力じゃ、制御できない」

「ん？ とにかく同じことすれば、いいんだよね？」

「ああ。そうだ。頼んだぞ」

「うん」

少年は、まるで新しい玩具でも貰ったかのように、小男の手首に繋がる縄を手取る。

小男は残った縄を器用に扱い、自分と少年を胸の位置で結びつけた。

「よし。その布を抱えるんだ。畳んであるまま、形を崩すなよ」

小男は、床の上の白い布を指す。

「うん」

嬉々として、少年は言われた通りに事を進める。

小男の、少年と重なる肩口から背中が、じわりと温かい。

「……できたよ！」

快活な声。

「よし」

小男は、深く息を吸い込んだ。足が震えていることを白覚する。

「俺が飛んで、一つ数えるから、そしたらすぐに離すんだ。投げ上げる要領だぞ？　……お前、一つくらいは数えらるんだよな」

「数えられるっ」

「あはは。頼もしいな。後は、教えた通りに縄を頼むぞ」
「う。笑わなくてもっ。うん。ちゃんとやる」

「この技は、均衡が大事なんだ。できるだけ体から力を抜いて。俺、いや、何でもいいから助かるって信じる」

途端に、風が、格段に強くなる。

少年が何か言葉を返したが、小男の耳には届かなかった。小男は舌先を長々と出し、風の様子を確認する。その結果がどうであれ、飛ぶしか道はないのだが。

下からは、物騒な声音が響いてくる。

もう時間がない。

小男は囲いの縁に這い上がる。その足は、もう、震えてはいない。

「行くぞ。それッ——ひとつッ！」

バツ！

突如響いた、まるで帆でも張ったかのような音に、兵達が一斉に上を見た。

「な、何だ？」

紺碧の空に浮かぶ、白い大きな花。

見る見る花卉が膨らみ、緩やかな半円と化す。

「あいつら……」

一番上にあるべき帆布がない！

兵の長はさっきの違和感の正体を、知った。

唸つても、もう遅い。

「やられたッ」

「いや、まだだ。追いましよう！」

口々に叫び、兵達は一斉に駆け出した。

風下へ。

船尾へと。

白い帆布は海峡からの強風を孕み、四隅を括りつけられ
た小男の四肢を、限界まで引き反らす。

二人分の体重は、予想よりも負荷が大きい。高度は容赦
なく下がる。

「……うえ、キツツい。右も左も、どっちも引けえ！」

「うん！」

背の上の少年は明るく応じ、両の腕に力を込める。ほとんど縄はビクともしなかったが、それでも懸命に引いた。

「おいでなすったな」

小男は首を振って背後を見る。抜き身の剣を振り回す兵の長が、視界に現れた。

「来た？」

両腕に力を込めるだけで精一杯の少年が、それでも楽しげに訊いてきた。実際、高揚感に溢れて、頭の芯がフワフワとしている。

「ああ。俺の真下に走ってきたよ」

誤魔化しはせずに、しかし小男も、のんびりと答える。
できることは全てやった。

後は、運に任せるだけだ。

腕はともかく、少年の助けのない足のほうが限界に近づく。みしみしと、骨が嫌な音を立てた。

「逃がさんぞ！ そらそら、降りてこい」

兵の長は剣を高く掲げる。

その切っ先は、今にも小男の腹に届きそうだ。

兵の長だけではない。皆、次々に追いついてくる。

「——いつ」

精一杯縄を引いている少年の、掌の皮が剥けた。力が緩

み、均衡が崩れる。

「おわ！」

不意のことに、小男は対応ができない。

——ガクン！

一気に下がる。落下といつてもいい。

シュツ。

兵の長を追い抜いた一人が、剣を振るう。

小男の上着が、裂ける。

舌打ち。目が合う。

鞆をさせてやった、一番年少の兵だった。

小男は思わずニヤリとする。

「よくも！」

はつきりとその声は聞こえた。

もう、掴み降ろされる高さにまで下がっていた。

だが、小男は快哉かいさいを叫ぶ。

「あはははは。お役目、ごころうさん！」

船尾に向けて、滑るように落下する小男達は——小男は——持てる力の全てを両足首に集中させ、ぐつと前に出す。

縄が引かれ、直立の姿勢になり、当然そのままストンと甲板へ——いや、甲板ではなく、船尾の外側に固定してある筏の上に着地した。

その勢いと重みで、切れ目が入った縄が切れる。小男と

少年を乗せたまま、筏は真っ直ぐに落下していく。

風を全て逃がした帆布が海面へと落下し、二人の上に覆い被さった。

「わあああっ！」

少年は、激しく身体を打ち付けた。受身など取れる筈もない。

「ちよつと、これ」

視界を真っ白に遮る布から逃れようと、手足をバタバタとさせた。

状況が掴めないままの少年を構うことなく、小男は、二

人を繋ぐ縄を歯で引く。たちまち解けた。流れるような動きで、上着の内から小刀を取り出し、空を切る。

——ザッ。

布が一直線に裂けた。小男は、そこから這い出る。

再び歯を使い、両手首を戒めている縄の端を噛み引き、船上を一瞥。

ほんの僅か動きを止めた後、小男はありもしない帽子を降るような仕草で、兵達に別れを告げる。そして櫂を握り締めると、一心不乱に漕ぎ出した。

「やられた……！」

手摺に飛び付いた兵の長が、臍ほぞを噛む。

儀式の支度に手を取られ、筏に細工をされたことに全く気付かなかつた。

長だけではなく、兵達全員が頬を燃やした。

「追いましょう。このまま逃げられたとあつては、我々の名折れです」

「そうだ！　まだ間に合う」

兵の長は一喝する。

「帆を張れ！　どうせ櫂しかない、舵もない筏だ。すぐに追いつく」

兵達は、たちまち持ち場に走る。

儀式の遂行も大事だが、それ以上に外国の小男と奴隸の子供に虚仮こけにされたという事実。屈辱以上の感情が、皆を苛さいなむ。

兵の長は、徐々に遠くなる筏を睨み続ける。

その速度はあくまでも緩やかだ。焦ることはない――。

「た、大変です！」

声を裏返らせて、珊瑚の指輪の兵が駆け寄ってきた。

「帆が……」

震える指先で示す。

「な……！」

帆を張ろうと、引く為の縄を手にとった兵が呆然と立ち

竦^{すく}んでいた。

残された四枚の帆の全てに、ずたずたに切れ目が入っている。

「は、はは、ははは」

兵の長は、膝を突いた。

二人の逃亡者を乗せた筏は、十分に追える場所に居る。

——これが陸上ならば。

「こうなったら」

一番年少の兵が胸当てを取り去り、海へ飛び込もうとする。

「よせ」

兵の長は止めた。

「何故です！　まだ間に合います」

「もういい。ここの潮流は危険だ。一步間違えれば、お前が捧げ物になる」

「しかし」

「もう……いいんだ。それよりも、帆の補修を急ごう」

自ら飛び込み追いたいのを堪え、兵の長は皆を宥めた。己の立場を鑑み、奥歯を噛み割りそうになりながらも、自分を抑えた。

やがて、筏は見張り台からも見えなくなり、その行方は皆目知れないまま――季節は巡る。

西方の、とある小国の端に位置する田園地帯に、奇妙な二人組がやって来た。

一人は黒尽くめの、愛嬌のある小男。ヌラヌラと光る珍しい生地でできた、たつぷりとした布膜を身に付けている。足が不自由なのか、両脇の下に太い杖を挟んでいた。

一人は白尽くめの、逞しい長駆の若者。その藁色の髪と瞳は大層印象的で、はっと人目を惹く美丈夫だ。眼が悪いのか、瞬きが深く、日差しの下では辛そうに瞼を閉じている。対照的な二人は、ささやかな奇術を身過ぎ世過ぎにしていると触れ回った。

それを聞いた道楽者と名高い、その土地で一番の金持ちが二人を招いた。

「このお屋敷にいらつしやいます全員を。使用人の皆々様にも、今宵ばかりはどうぞ旦那様のお情けを。一人残らず皆々様に、私どもの奇跡の技の数々を、たつぷりと御覧戴きとうございます」

黒尽くめの小男が、うやうや恭しく礼をした。

おうよう主人は鷹揚に頷いて、呼び鈴を振る。集まった者は皆、若く見目良い女ばかりであつた。

「こちらで全員でございますか？」

「うむ。全員だ。さあ、楽しませてもらおうか」

「そうですか。これで、全員、と。では、皆様、広間の真ん中へとお集まりくださいますせ」

見世物の都合上という二人の頼みで、卓や椅子も全て部屋から出してあつた。女達は皆、期待に胸を躍らせつつ、さんざめく。美丈夫に意味深長な視線を送る、大胆な者もいた。

「恐れ入りますが旦那様はこちらへ。大層大事なお役目がございます故」

「おお、そうか。うむ」

美丈夫が、主人を扉の方へと誘う。いざな

と、唐突に小男が、杖の片方を天井へ振り上げた。

ズドン！

不意を打たれた観客は、その轟音に縛られる。それでも、きつと出し物の演出かと信じ、半笑いのままの女もいた。

「おっと、動くな。こいつは愉快な見世物だ。しつかりそこで見ていろよ。だけど、見るだけだ。絶対に動くなよ。動くと」

ズドン！

再び轟音。

——杖には、銃が仕込んであつた。

天井に穴が穿^あき、バラバラと漆喰^{しっくい}が落ちる。

「こうでございますよ」

小男は天井を撃った、まだ先端から煙が出ている杖を主人へと突き付けた。更に残った片方を、愕然としている観客達に向ける。

「旦那様は嘔吐きでございます」

からかい口調で主人に告げる。

「私どもは、このお屋敷にいる全員をと申し上げました」

「ぜ、全員だ。全員いるぞ」

「またまたご冗談を。一番大事なお方がお見えでないよう
でございますよ。……なあ、そうだろ」

「ななな、何を」

主人はすっかり怯えてしまい、もはや歯の根が合わない。

「一番大事なお方は、一番奥の奥に隠しておきたいってのが、人情ですかね。おっと、あんたには人情なんてもんは、なかつたな」

「おおお前ら、ななな何を」

「さあ、案内してもらいましょう。お嬢様方は、どうぞこちらでお寛くつろぎくださいませ。但し、この部屋から一步でも出たら」

小男は杖を模した銃を片方、抱き合い震える女達に向けると、何でもないことのように引き金を引く。

さつきまで半笑いだった女の頭を、銃弾が掠かすめた。暖炉の上に飾ってあつた高価な陶器の花が、けたたましい音と

共に碎け散る。

二人は恐怖に脚をもつれさせる主人に、目的の扉の前まで案内させた。その背には、小男が構える銃口がぴつたりとくっ付けられている。

「鍵を開けろ。いちいち言われなくても分かるだろ」

小男が余ったほうの銃で突付き回すせいで、怯えた主人は鍵束を何度となく取り落とす。

「やめなよ。ほら、よけいに時間がかかる」

美丈夫が間に入り、鍵束を取り上げた。

「ぼくが開けるよ。どのカギ？　これかな」

把手とってと同じ材質と細工で造られた、一際目立つ鍵。

「——これだ」

櫳の木でできた重い扉が、ゆつくりと開く。

「おっと、お前は見るんじゃないぞ。もう、見世物は終わつたんだ」

見苦しく泣き喚く主人の背を小男が銃で抑え、床に伏せさせる。

美丈夫が、大股で中に一步。そして、また一步。

豪華ごうしゃな造りの部屋だが、空気が酷く澱よどんでいる。扉から

入る、僅かな灯りだけが頼りだった。

壁際に、真っ黒い塊。よく見ると人の形をしている。

じやらりと、金属の擦れる音。

その前で、美丈夫は歩を止める。

「――ぼくだよ」

そこに蹲うずくまっていたのは、ただ美しいだけの、生きることを諦めた少女だった。

折れそうに細い首に嵌められているのは、真鍮しんちゅうの首輪。そこから伸びる鎖は、傍らにある大きな寝台へと繋がっていた。

少女は、ゆらりと顔を上げ、自分を見下ろす逞たくましい青年に目を向けた。その髪も瞳も、眼の前の美丈夫と同じ――
藁色。

美丈夫は、ゆっくりとゆっくりと、少女へ手を伸べた。

「おとーと、だよ。ねえさん」

少女の瞳に、光が宿る。

かつて名もなき二人組、西へ西へと、ひたすらに。

たった一つの手を取る為に。

取ったその手がいつかまた、誰かの手を取るその日を信じ

——君よ知るや——。

もっと 読みたいですか？

竹の子書房文庫は、読者の皆様のご意見・ご感想を糧に、日々ニヨキニヨキと成長します。もっと読みたい、続きを読みたい、もうやらんでいい、などなど、ご意見ご感想などありましたら、

<http://www.tknk.info/?p=1895>

こちらのページまでご感想をお寄せ下さい。また、

竹の子書房 ペテン師と身代わり

に、ご感想を一言添えて ReTweet してくださいませ。

RT がたくさん付くようでしたら、大慌てで続きを書きます。

竹の子書房文庫創刊に寄せて

竹野正法 竹野美恵

竹の子書房の前身である筍書房は、昭和二十年、終戦直後の東京に創立した。空襲により焼け野原となった国土を前に、我々は何故負けたのかを自問自答した創業者・竹野正法は、そこに彼我の文化の差を痛感したという。当時の日本は学童の就学にも事欠く有様であったが、良い図書を広く頒布せしめることで日本の教育水準を一層高めると同時に、知を愉しむ、娯楽としての読書の価値を広めるべく、古今東西のあらゆる娯楽を書籍化することを決心した。当初、一刻も早い国土の再興を願った竹野正法は、自らの姓から一字取り「竹書房」と名付けることを考えた。しかし、創立当時、空襲で焼け残った土に半ば埋もれたあばらや住まいであった竹野は己の分を弁え、敢えて「未だ土の中」として筍書房と名付けた。竹野正法は、焦土の中から拾い集めてきた焼け板に、燃え落ちた家屋の墨を溶いて「筍書房」と墨書した。焦土の苦しみを忘れまいぞと誓うこの看板は、平成頃まで長く筍書房の誇りと誓いを現すものとして本社正面玄関に掲げられてきた。その後、竹野正法の願いは須く実現された。昭和二十七年、サンフランシスコ平和条約の発効により自由を取り戻し、続く朝鮮戦争特需で奇跡の復興を成し遂げた日本にあつて、筍書房は広く教育と娯楽を提供するべく粉骨碎身し、筍書房はウィットとペーソスを身につけた教養人の育成に努めた。

平成の初め、日本は空前のバブル景気に沸いた。筍書房は経営の拡大を目指して不動産経営など多角経営に乗り出していたが、バブル崩壊と同時に経営が悪化。会社更生法適用が視野に入る、会社存続の危機に見舞われていた。創業者・竹野正法は、失意の中、会社存続を願って世を去った。この筍書房の空前の危機を救ったのが、後に社長職を継ぐ竹野美恵である。既に萌芽はあったものの、男社会であった出版界ではその内容に眉を顰める者も多く日陰に甘んじてきた「やおい」に着目した竹野美恵は、女性読者の獲得を狙ってこの分野を表舞台に引き上げた。竹野美恵の狙いは的中し、日陰で腐り果てていた日本全国の腐女子、貴腐人の心を掴むことに成功した。筍書房社内ではこれを「美恵流」と称して讃え、後の「BL」の語源ともなった、とされている。筍書房は美恵流の成功により息を吹き返し、娯楽出版社として甦った。竹野美恵はさらに改革を推し進めた。旧来の筍書房という社名では如何にも厳ついイメージが強く、美恵流に馴染んだ若い読者に近寄りがたいイメージを与えてしまう。そこで、CI戦略に則り、社章と社名の刷新が進められた。社のシンボルマークである竹の子印はこのときに社章として選ばれた。竹の子印はその後、数代に亘って修正が加えられ、平成二十二年に現在の形となった。社名については「筍」の文字を読めないゆとり世代の若年層にも読める文字をという配慮から、音を同じくしつつ「竹の子」とした。昭和二十年の創立から六十五年をして、ここに現在の「竹の子書房」の名称が定着した。

竹の子書房はその後躍進を続け、電子書籍事業に進出、特化を果たした。しかし、創立時の竹野翁の気高い志を忘れることなく、竹野美恵の柔軟さを蔑ろにすることなく、なお一層の進展と社会への貢献を続けていくべく、ここに誓いを新たにしたい。



※本作は、ポ〜ンさん (@DemizuPosuka) が描かれたイラスト「海」への寄稿作品です。竹の子書房で“絵が先”シリーズとして発行するにあたり、ご本人の許可を得ております。

ペテン師と身代わり

2013 年 3 月 14 日 初版発行

出題画 ポ〜ン
著者 黒実操 @kuromimigen
企画発案 ひよーじ @s_hyouma

監修 加藤 一 @azukiglg
校正 竹の子書房校正課野戦校正師団
装幀 田中真美 @tanakandesu

発行人 加藤 万夜
発行所 竹の子書房 @takenoko_shobo 
 <http://www.takenokoshobo.com/>
製版所 竹の子書房組版課